

1 南地区の現状

(1) 地区の概要

南地区は、17 行政区（内 12 区が限界集落、1 区が活動休止）、世帯数 397 戸、人口 905 人ですが、高齢化率が 48%になり様々な生活課題が顕在化している状況です。

コミュニティでは、発足時の取り組み目標を「はじめの第一歩計画」にまとめ、この計画に基づいて活動してきましたが、新たな事業に取り組むために更に「地域づくり計画」を定めて地域全体の活性化や福祉の増進を図っています。

また、コミュニティ活動に対し多くの賛同者や社会的信用を得るために、より自立した活動が可能な NPO 法人へ組織変更を行うなど、運営面でも工夫を重ねてきました。

しかしながら、予想を超えて急速にすすむ過疎・高齢化は、敬老会、運動会、へき地保育園の廃止、及び小学校の統合へとつながり、地域の活性化に取り組む中、深刻な課題として受け止めています。

交通の便は、コミュニティセンターから市役所竹野振興局、市役所本庁舎までそれぞれ車で約 15 分と比較的便利ですが、車を運転できない人にとっての生活は不便で、公共交通機関による豊岡市内へ直通運行を望む声も多く出ています。

また、農家では高齢化により農作業が難しくなってきた、後継者もいないといった課題に直面していますが、春から秋にかけて開催している地元野菜販売の「わいわいみ・な・み市場」は、一つの生きがいとなっています。同じ場所でボランティアグループが週 1 回開催している「喫茶よつば」は、地域の憩いや交流の場として賑わっています。

こうしたなか、課題を抱えながらも地域の活性化に向け、取り組んでいる事業は次のとおりです。

(2) 事業の取り組み

ア 地域振興・活性化

(ア) 南地区の農地を守り耕作放棄地を増やさないことを目的として営農組合を設立し、農作業の受託仲介を中心に活動してきました。

さらに、シカ、イノシシによる獣害から農地を守るため、防護柵設置や捕獲等にも取り組んでいます。

(イ) 「イナカー」に替わる交通手段の確保に取り組んできました。

「イナカー」以上「タクシー」未満を合言葉に「ドアツードア」の公共交通を目指して、「のりあいみ・な・み」の導入に向け試験運行を行っています。

(ウ) 昔ながらの「味噌」の技術伝承を目的に味噌づくりに取り組んでいます。

この取り組みは回を重ねるごとに参加者も増え、地域全体に広がりつつあります。

イ 健康・福祉

高齢者が地域とのつながりを維持しながら、必要な支援を受けたり介護予防に取り組むことにより、自立意欲を向上させるための事業として、「通所介護事業」「生活支援サービス」など、介護予防活動に取り組んでいます。

また、健康の維持を図ることを目的として、ウォーキング、玄さん体操を実施し

NPO法人わいわいみ・な・み地域づくり計画 (2023 改定)

ています。

ウ 地域防災・防犯

災害時は、行政や救援者も動けないことが予想されることから、「地域でお互いの命を守る」「行政に頼りすぎない」を合言葉に、発災後 3 日間を自分たちで乗り切るための災害時避難マニュアルを作成し災害に備えています。

エ 人づくり事業

竹野南学園、子ども教室、うたごえ喫茶、石鹸作り教室などを実施しています。

オ 広報・情報発信

毎月、広報「わいわいみ・な・みだより」を全戸に配布して、コミュニティの動きや取り組みをお知らせしています。また、故郷を離れて暮らす人や多くの皆さんにフェイスブック、ホームページで地域の情報を発信しています。

2 地域の課題

(1) 市町合併以降の人口推移

	世帯数(戸)	人口(人)	人口/増減	人口増減率
平成 17 年	415	1, 418	—	—
平成 21 年	403	1, 302	△ 116	91. 8%
平成 25 年	402	1, 162	△ 140	89. 2%
平成 29 年	390	1, 035	△ 127	89. 1%
令和 4 年	397	905	△ 130	87. 4%
令和 22 年	—	463	△ 442	51. 2%

* 令和 22 年の人口は、豊岡市の推計人口から引用

南地区の人口は、平成 17 年の 1, 418 人から令和 4 年には 905 人に減少し、17 年間で 36%の人口減少率になっています。この間、世帯数の減少が少ないことや限界集落が 12 区になっている状況から、高齢者を中心とした世帯が増加している状況が窺えます。

また、最近では、地域で唯一の食堂や農協が閉店するなど、地域にとっては深刻な状況です。

課題解決に向け取り組む中、みんなが安心して暮らせるよう、地域の在り方を考えて行かなければなりません。

(2) 後継者不足

コミュニティ全体の高齢化が進み、事業の継続に向けた人材育成が課題となっています。また、集落機能の維持が困難な集落もあり、コミュニティ内連携を考え、お互いに助け合う体制づくりが必要です。

(3) 課題意識の共有化

人口減少、高齢化、交通課題など、地域運営にあたり直面している課題を一人ひとりが共有し、主体的事業参加による取り組みが必要です。

3 計画策定の目的

コミュニティ発足後 5 年が経過し、順調に事業展開する一方で新たな課題も見えてき

NPO法人わいわいみ・な・み地域づくり計画 (2023 改定)

ました。これまでの取組みを振り返り今後のコミュニティの在り方を検討すると同時に、地域の活性化と、みんなが安心して暮らせる地域づくりについて考え、課題解決に向けて取組むために計画を策定します。

4 目標の取組み

コミュニティが「自分に何をしてくれるか」でなく、「自分は何ができるのか」、そんな発想で「地域振興・活性化」「健康・福祉」「地域防災・防犯」「人づくり事業」「広報・情報発信事業」に取り組み、活力ある地域づくりやみんなが創るコミュニティ活動を目指します。

5 計画改定の手順

「はじめの第一歩計画」及び「地域づくり計画」の策定では、地域のみなさんから様々な意見をいただき、計画にまとめてきました。今回は、若者の視点から南地区の現状や課題を見てもらい、「地域づくり計画（改定）」に反映しています。

人口減少、高齢化がますます進む中で、「住み続けたい地域とは何か」を考え、10年後に南地区が目指す目標を「地域づくり計画（改定）」にまとめています。

課題の検討にあたり、中山間地域の地域福祉を専門とされている鳥取大学の竹川先生にご協力いただき、学生のフィールドワークの中から地域の現状と課題を検討、竹野南地区の持続可能な地域づくりの基本方策について、様々な視点から助言をいただきました。後段に「若者の目線で見ると地域の強みと課題」「若者が考える地域の将来像」としてまとめていただきました。

NPO法人わいわいみ・な・み地域づくり計画 (2023 改定)

6 事業計画

この計画に基づく取組は、年度ごとに総会の承認を得ることとし、途中の軽微な変更は、企画会議、理事会等で協議します。

また、計画の円滑な推進を図るために 3 年ごとに振り返りや見直しを行うものとします。

地域づくり計画（みんな 仲良く 未来に向けて）

住んでいる人や訪れる人に温かで楽しい竹野南地区をめざして

プロジェクト名		2023 年	2026 年	2029 年	2032 年
現在 取り 組ん で い る 事 業	集落営農・農地活性化事業	○	○	○	○
	しゃべり場づくり・買い物場所づくり	○	○	○	○
	地場産品づくり	○	○	○	○
	地域交通課題の取組み	○	○	○	○
	支え合い生活支援事業	○	○	○	○
	健康づくり事業	○	○	○	○
	玄さん体操事業	○	○	○	○
	避難支援体制づくり	○	○	○	○
	人づくり事業	○	○	○	○
	広報・情報発信事業	○	○	○	○
竹野南地区の魅力化と関係人口の増加に取り組めます。（注 1）					
新 た に 取 り 組 む 事 業	コミュニティサポーターとの交流（注 2）	○	○	○	○
	コミュニティ事業の後継者育成	○	○	○	○
	集落機能維持への取組み	△	△	○	○
	空き家対策事業	△	△	○	○
	災害への備え	○	○	○	○
	情報発信の在り方を考える	○	○	○	○

* △検討中の事業 ○実施中又は予定している事業

注 1) 関係人口とは、地域に移住する「定住人口」でもなく、観光に訪れる「交流人口」でもない、地域の人々と多様に関わる人々のことを指す言葉です。

注 2) コミュニティサポーターとは、地域コミュニティやまちづくりの支援に関する知識・経験等を有しコミュニティ活動を支援する人のことです。

NPO法人わいわいみ・な・み地域づくり計画 (2023 改定)

7 計画の取組み

現在の事業に新たに取り組む事業を組み入れ、関係団体や知識・技術のある人で構成する「チームみ・な・み」が主体になって企画・立案・実施します。

途中、事業内容に大幅な変更が生じたときは、理事会や総会に諮りながら計画を見直すものとします。

8 まとめ

この計画は、コミュニティ発足時から取り組んできた事業を振り返り、南地区の新たな目標を定めるものです。

計画を進めるにあたり、コミュニティ構成団体、その他の団体とも連携を図り、役割分担しながら取り組んでいくものとします。

個人が大事にされ、それでいて孤立せず、まわりの住民どうしがゆるやかにつながるコミュニティをめざし、みんなが安心して夢と希望をもって生活できる、魅力ある地域づくりに取り組みたいと考えます。

鳥取大学地域学部フィールドワークのまとめ

はじめに

地域づくり計画の策定に向けた助言を得るため、鳥取大学地域学部の竹川俊夫先生に協力を依頼したところ、令和3年度から4年度にかけて、1年生の「基礎ゼミ」の学生がコミュニティでフィールドワークを実施することになりました。

この「基礎ゼミ」のフィールドワークにおいて、学生のみなさんが、住民や関係団体との交流やヒアリング活動を通じて地域の強みや課題をについて学び、コミュニティの今後の実践的課題を提案する機会が設けられました。ここでは、2か年にわたる学生の活動記録から集約した「竹野南地区の強みと課題」を紹介します。

1 若者の目線で見ると地域の強みと課題

【竹野南地区の強み（魅力）】

1) 豊かな自然

全国各地から鳥取大学にやって来た学生が、竹野南地区に来て最初に目にするのが豊かな自然です。きれいな川のせせらぎや季節によって趣を変える山の木々は、住民にとっては日常の中のありふれた景色でも、旅行等から帰ると何故かホッとする感じがあります。都市部から来た人々にとっては、その自然豊かな日常こそが非日常であり、感動を覚えたり癒しを体感できたりする価値あるものと言えます。

2) 住民のつながりと支えあい意識

次に学生たちは、喫茶よつばや市場まつりを通じて住民のみなさんと交流しました。そこで気づいたのは、住民のみなさんのつながりの強さです。よつばやコミュニティのスタッフのみなさんも来られた住民のみなさんも、みんな顔と名前を知っていて、互いを思いやる温かい会話が繰り広げられていました。都市部では、家族関係や近隣関係が希薄化し、孤立が社会問題化していますが、竹野南には古き良き人と人とのつながりが現存し、それが住民の暮らしに安心感を生み出していると分かりました。

つながりの強さはコミュニティが取り組む福祉活動でも感じ取れます。長い間仲良くしてきた仲間と人生の最期まで一緒に暮らしたいと思う気持ちがあるからこそ、ミニデイサービスや見守り等の住民主体の福祉活動が積極的に行われ、それを担う人も利用する人も、当然のようにお互い様の気持ちで支えあえるのではないのでしょうか。

3) コミュニティの活動に協力的な人が多い

市場まつりと喫茶よつば以外にも、地域防災やミニデイサービス・訪問サービスの活動に参加して気づいたのは、コミュニティの呼びかけに応じて多くの住民が活動に参加し、ボランティアとして積極的に協力していることでした。参加する住民のみなさんにはコミュニティに対する信頼が感じられ、コミュニティの側にはその期待に応じてさらに頑張ろうとする好循環が根づいているように感じられました。

4) 利活用できる地域資源（コミュニティセンターや廃校等の施設）がある

フィールドワークでは、コミュニティセンターを中心に様々な活動を行いましたが、このコミュニティセンターが、地区の拠点施設として多方面で機能していることが印象的でした。とはいえ今後コミュニティ活動を拡大するとしたら、センターだけでは手一杯かもしれません。そこで地区内に目を転じると、廃校になった小学校や保育園、閉鎖された店舗等、リフォームすれば地域活動の拠点として有効活用できそうな遊休施設が少なからず存在していることが分かります。将来的には空き家も増えると予想されますが、これらを含めて地区内には潜在的な地域資源が豊富に存在しているととらえ直すことができます。

5) 地域の特産品（三原味噌、床瀬そば等）がある

持続可能な地域づくりを推進するには、たとえ小規模であっても地域内外からお金が循環する経済の仕組みづくりも不可欠な要素となります。その意味では、地域の強みとして、竹野南地区には古くから各家庭つくられ食の支えとなってきた三原味噌や、今では観光客がそれ目当てでやって来るようになった床瀬そば等の特産品があります。今後はこれを地域外に広く発信してさらに価値を磨きあげるとともに、新たな特産品の掘り起こしも大切になると思われます。

【竹野南地区の課題】

少子高齢化、人口減少や農林業の衰退、公共交通をはじめとする生活インフラの衰退に伴って生じる様々な問題や課題については、行政やコミュニティの中で議論され、一定の対策も進められてきた経緯がありますので、ここでは学生の目線から見た地域づくりの課題として、以下の3点を提起したいと思います。

1) 情報発信力が弱い

現在、竹野南地区コミュニティの情報を得る手段として、ホームページやフェイスブック・インスタグラム等のSNSが活用されています。それぞれ意味のある取り組みではありますが、「若者」や「若い子育て世帯」のように、特に「見て欲しい、来て欲しいターゲット」を決めて、それらの人々の関心を引くような情報発信ができていない訳ではありません。また、地区の魅力や特産品を積極的にアピールできている訳でもありませんので、観光客の多くは城崎温泉や神鍋高原等の有名観光地で足が止まってしまい、竹野南まで来ないか、来ても素通りされてしまうことになります。

今後持続可能な地域づくりを推進する上では、コミュニティがさらに地域外に開かれ、世代を超えた多くの人々との交流を促進することが不可欠になりますが、そのためには、ターゲットを明確にしつつ地区の魅力を明確に伝える「攻めの情報発信」を確立することが重要な課題になると考えられます。

2) 地域外から来た若年世代の人・家族を受けとめる仕掛けがない

情報発信力の課題がクリアできたとしても、次に地域外の人々を竹野南のどこでどうやって受け止めるかという課題が生じます。例えば、三原味噌の美味しさや味噌を活用

した様々なレシピを伝え、SNSを見た観光客がそれに関心を持ったとしても、竹野南の中に地元の食材を活用した食事処がないと、観光客はその魅力をリアルに体感できず、三原味噌の売り上げにも貢献することができません。そのため、床瀬そばとも連携しながら、国道から比較的近いエリアに、食事処を含めた観光客を誘う拠点施設をつくる必要があると思われます。

また、そうした施設をベースに都市部の若者や子どもとの接点がつくられると、彼・彼女らに“竹野南ファン”としてリピーターになっていただく仕掛けが必要になります。そうすると、今度は以下の3)の課題に取り組む必要性が生じます。

3) 地域の強み(魅力)を活かせていない

地域外から多くの人々に竹野南まで足を運んでもらうには、足を運ぶだけの理由(価値)が見いだせるかどうか鍵になります。そしてそのためにコミュニティとして取り組む必要があるのは、上記で示した「地域の強み(魅力)」を徹底的に磨くことだと考えられます。

例えば1)の「豊かな自然」を磨くこととは、まずは竹野南野地区全体を大きな庭ととらえて、美しい景観を守るとともに子ども大人も自然の中で安全に遊び楽しめるよう、手入れをしっかりと行うことです。それが出来れば、地域外の子どものたちや子育て世代の若者たちに、自然体験ツアーや森林浴ツアー、週末森のようちえんのような、自然を満喫してもらうプログラムを開発・提供することが可能になり、竹野南ファンを増やすことが可能になります。

2)の「住民のつながり・支えあい意識」を磨くこととは、3)のコミュニティ活動も含め、住民の健康づくりや交流・支えあい活動等を通じて、住民一人ひとりの笑顔や人を大切にする価値観をさらに磨くことです。学生たちが住民のみなさんとの交流を通じて、竹野南の一番の強み、優れた魅力だと感じたのは、やさしく学生を受け止めてくださった住民のみなさんに他なりません。そんなみなさんの「輝き」に触れることこそが、新たな竹野南ファンを生み出し、リピーターとなって交流が活発化する鍵になると思います。例えば、都市の子どもたちや子育て世代の若者が、住民の自宅を使った「民泊」で交流し、田舎暮らしの良さを体験することは、都市部では失われてしまった日本の古き良き伝統や生活様式を復興させる機会になるとともに、将来的には体験者を竹野南へのリピーターから「移住者」へと変化させることになるかもしれません。

最後に、4)の「利活用できる地域資源」を磨くこととは、以上のような「地域の強み(魅力)」を地区内外に発信し、地域外からの訪問者を受け止め、“竹野南ファン”に変わってもらうための施設として、積極的にリフォーム・リノベーションを行い活用することです。「民泊」の他にも、保育園や学校を宿泊施設として再生させ、そこを子どもたちや学生の合宿所や、リモートワークの拠点(いわゆる「ワーケーション」)等として活用したり、地元の新鮮な魚やオーガニック食材を使った安心安全な郷土料理を提供する食事処として活用することができれば、地区のなかに雇用の方が生まれるとともに、多様な形で都市農村交流が進んで関係人口の拡大につながると考えられます。

2 若者が考える地域の将来像

「竹野南地区の課題」で述べたように、コミュニティが将来に向けて持続可能な共生の地域づくりを推進する鍵は、「地域の強み（魅力）を磨いて活かす」ことだと考えます。竹野南に限らず、これまでともすれば、地域の課題は「マイナス要素」として考えられ、マイナスを何とかゼロにしようとする努力が各地で続けられてきた傾向が強かったと言えます。福祉活動をはじめそうした努力が今後も重要であることは言うまでもありませんが、2040 年を見据えた地域づくりを考える上では、「地域の持続可能性をどう確保するか」というテーマを避けて通ることはできません。

「地域の持続可能性」とは、大別すると「コミュニティの様々な機能の持続可能性」と「住民の地域生活の持続可能性」の 2 側面があり、これまでの地域づくり計画では、主に後者への対応が中心で、豊岡市が進める地域包括ケアシステムづくりと連動させた地区の健康づくりや福祉活動が特にその中核を担ってきたと思います。

一方、「コミュニティの様々な機能の持続可能性」については、農林業を柱とする地域経済の機能や生活課題を共同で解決する自治機能が中核となり、竹野南地区においては、集落（区）の自治機能を補完する新たな仕組みとして地区コミュニティ（わいわいみ・な・み）が創設されるとともに、農業・農地の持続性を守るために営農組合が創設されてきました。しかしながら、急速な高齢化と人口減少をふまえると、経済機能・自治機能ともに、次世代の育成が喫緊の課題となっている一方、地域経済においても農業を補完する経済の仕組みづくりが急がれます。それをふまえると、「コミュニティの様々な機能の持続可能性」を高める鍵は、経済活動と自治活動の次の担い手となる子育て世代の若者を、U ターン I ターンを問わずいかに地域に招き入れるかということになります。

そうすると、これからの地域づくりの基本的な方向性は、「地域の強み（魅力）を徹底的に磨く」ことと、その「強み（魅力）を戦略的に情報発信する」こと、そしてその結果として「関係人口を拡大する」ことが焦点になると考えられます。このためには、「マイナスをゼロに」という考え方の地域づくりから、「マイナスをプラスに」や「地域の強みを磨いてマイナスを克服する」という、発想を転換させた地域づくりが求められることになると考えられます。

以上をふまえると、竹野南地区の将来像は、「**来たくなる、住み続けたくなるまち**」であり、その鍵は「**竹野南地区の魅力化**」に他なりません。そしてそのための手法として重視すべきと思われるのは、上記の【竹野南地区の課題】で示したように、**1）** 攻めの情報発信、**2）** 地域外の若年世代の人・家族を受けとめる仕掛けづくり、**3）** 豊かな自然環境の保全と活用、**4）** 住民参画による都市農村交流の促進、**5）** 関係人口拡大に向けた遊休施設の活用、の 5 点だと考えられます。